

RIO+20に向けて—グリーンエコノミーと企業の役割—

第13回

今年6月20—22日に、ブラジルのリオ・デ・ジャネイロで地球サミット「国連持続可能な開発会議（通称「リオ+20」）」が開催される。地球の未来に関わるキーパーソンが集まる会議であり、企業にとって国際的な論議に参加し、自社活動をアピールする良い機会となる。

田村 賢一（株式会社イースクエア コンサルティンググループ マネジャー）

たむら・けんいち ●監査法人系のコンサルティング会社にて、CSR関連支援業務、企業向けのISO14001 導入コンサルティング、CSR・ビジネススキル講師を経験し、2010年にイースクエアに入社。環境・CSR分野の各種調査、BOPビジネス支援等に従事。

リオ+20の歴史的背景

1972年にストックホルムで開催された「国連人間環境会議」が、世界で初めての環境問題に関する大規模な政府間会議であった。20年後、1992年にリオ・デ・ジャネイロで開催された「環境と開発に関する国連会議（通称「リオ・サミット」）」は、「持続可能な発展」や「生物多様性」などがキーワードとなり、「アジェンダ21」と「森林原則声明」が採択されるとともに、「気候変動枠組条約」と「生物多様性条約」が提起され、署名がなされた。

さらに10年後、2002年にヨハネスブルグで開催された「持続可能な開発に関する世界首脳会議」では、「ヨハネスブルグ宣言」が採択され、日本からの提案がきっかけで「持続可能な開発のための教育の10年（2005年—2014年）」が開始された。

そしてリオ+20では、主要テーマである、「持続可能な開発のための制度的枠組み」と「持続可能な開発と貧困根絶の文脈におけるグリーンエコノミー」を議論する。そしてこの中でも、「グリーンエコノミー」は産業界のリーダーシップを必要とするテーマである。

地球サミット関連年表

| | |
|-------|------------------------------|
| 1972年 | 「国連人間環境会議」(ストックホルム) |
| 1992年 | 「環境と開発のための国連会議」(リオ・デ・ジャネイロ) |
| 2002年 | 「持続可能な開発に関する世界首脳会議」(ヨハネスブルグ) |
| 2012年 | 「国連持続可能な開発会議（通称「リオ+20」）」 |

グリーンエコノミーと企業の役割

グリーンエコノミーは、色々な解釈はあるが、各国の政策や企業経営に環境保全の視点を統合し、人類の発展を目指す取り組みといえる。つまり、現在ある経済を「グリーン化」する実践的な活動になる。グリーンエコノミーには、貧困削減という文脈が組み込まれており、産業界はその解決に向けて重要な役割を担うと期待されている。

リオ+20に向けた産業界の動きとしては、世界経済人会議（WBCSD）・国連グローバルコンパクト等が、「Business Action for Sustainable Development 2012 (BASD2012)」を発足している。この団体は、各国政府に対して政策的な支援を通して、産業界がグリーンエコノミーへ貢献しやすい環境を作るように求めており、リオ+20の成果文書へも意見を出している。

リオ+20に参加する3つのメリット

企業にとって、リオ+20に参加するメリットは3つある。

まずは、グローバル文脈での課題の理解である。グリーンエコノミーの推進で重要なのが、環境・社会課題のグローバル文脈での理解と言える。リオ+20では世界の環境・社会課題が議論される予定であり、その最前線を理解するには良い機会となる。2つ目は、世界に向けた自社活動の発信だ。

前回2002年のサミットでは、世界104カ国の首脳と、国際機関や市民社会（NGO）など合計2万人以上が参加しており、その規模や影響力は大きい。そして3つ目は、ビジネス機会の発掘が挙げられる。自社の活動をアピールすることで、ビジネスマッチングの機会も増え、新しいビジネスの発掘や新興国・途上国市場へのアプローチも可能になる。

今後、国連や国内準備委員会などの各方面から関連情報が発信されてくることが予想される。企業としてはこれらの情報をいち早くキャッチし、自社の活動に反映していくことが求められる。手前味噌ではあるが、イースクエアでもリオ+20・グリーンエコノミーの情報発信プラットフォーム「グリーンエコノミー・ジャパン」を運営しているので、ぜひご活用いただきたい（[グリーンエコノミー・ジャパン](#)）。